

13. 慢性関節リウマチ患者の全身骨塩量

萩原 聡 古満 豊 荒谷 秀之
 三木 隆己 西沢 良記 森井 浩世
 (大阪市大・二内)
 小橋 肇子 越智 宏暢 小野山靖人
 (同・放)
 浅田 完爾 島津 晃 (同・整外)

緒言：慢性関節リウマチ患者 (RA) の骨塩量は、Single photon absorptiometry による橈骨についての定量が行われ、骨塩量は健常者より低いといわれている。しかしまた腰椎や、全身骨塩量についての検討はほとんど行われていない。今回われわれは、RA の全身骨塩量を Dual photon absorptiometry (DPA) を用いて検討したので報告する。

対象：当院通院または入院中の 40 歳～68 歳までの女性 RA 33 名 (平均年齢 55.6 ± 8.7 (SD) 歳)、および年齢、身長、体重をそれとマッチさせた健常者 33 名を対象とした。ステロイドを服用している者は対象外とした。全身骨塩量の定量は 37 GB1 (1 mCi) の ^{153}Gd を核種とするノーランド社製 DBD 2600 を使用して行った。

結果：RA 群の全身骨塩量は、健常者に比較して有意に低値を示した ($p < 0.05$)。部位別の検討では、脚部骨塩量が RA 群で有意に低値であった ($p < 0.01$)。年代ごとの比較では、40, 50 歳代においては両者間で有意差は認めなかったが、60 歳代では RA 群が健常者より有意に低値を示した ($p < 0.05$)。RA 群内の検討では、クラスによる全身骨塩量は群間で有意の差は認めなかった。また、罹病期間、ランスバリー指数、各種生化学パラメータと全身骨塩量の間にも有意の相関関係は認められなかった。しかしステージ III, IV 群患者では I, II 群患者と比較して有意に全身骨塩量が低値であった ($p < 0.05$)。

まとめ：RA 患者では全身骨塩量は有意に低値を取り、その差は 60 歳代で著明である。また、RA での骨塩量減少は関節破壊の進んだステージの高い例で著明である。

14. 骨軟化症 5 例の骨シンチグラフィによる検討

日野 恵 伊藤 秀臣 山口 晴司
 大谷 雅美 富永 悦二 才本 康彦
 柴田 洋子 宇井 一世 池窪 勝治
 (神戸市立中央市民病院・核)

骨軟化症は骨の石灰化障害のため類骨の著明な増加をきたす疾患である。その診断は血液尿検査、X 線写真、骨シンチグラフィなどにより行われるが、確定診断には骨生検が必要となることが稀ではない。われわれは 5 例の骨軟化症を経験し、その骨シンチグラフィを検討したので報告する。

対象は 5 例 (男性 2 例、女性 3 例、年齢 22～77 歳) であり、骨軟化症の病因としては胃切除後 2 例、低 P 血症性ビタミン D 抵抗性 1 例、ビタミン D 欠乏性 2 例であった。5 例中 3 例は組織学的に確定診断が得られており、他の 2 例は臨床的に診断したものである。血清 Ca は低値～正常低値、P は全例で低値、ALP は高値、%TRP は正常～低値、C-PTH は正常、 $1,25(\text{OH})_2\text{D}_3$ は胃切除後の 2 例を除き低値であった。骨シンチグラフィでの異常集積は肩関節で 3 例、肋骨で 4 例、脊椎で 2 例、骨盤で 4 例、股関節で 3 例、膝関節で 3 例、脛骨で 2 例、足関節では全例で認められた。肋骨、骨盤などへの左右対称性の集積は X 線写真の偽骨折に一致し、関節周囲への集積は X 線写真の osteopenic area に一致した。5 例とも治療としては $1\alpha(\text{OH})\text{D}_3$ の投与を行い、経過観察できた 3 例では臨床症状、血液検査などの正常化に伴い骨シンチグラフィでも著明な改善が認められた。

骨軟化症は臨床症状としては骨痛が強く、歩行障害を来す例も多いが、適切な治療により完治する疾患である。骨シンチグラフィの所見としては左右対称性の集積および加重関節の集積増加などが特徴である。しかし悪性腫瘍の多発性骨転移と類似の所見を呈することもあり、注意深い読影が必要であると考えられる。

15. 肺の転移性石灰化の骨シンチグラフィ像

波多 信 森本 敦子 小橋 肇子
 長谷川 健 西多 俊幸 岡村 光英
 小田 淳郎 越智 宏暢 小野山靖人
 (大阪市大・放)

骨シンチグラフィにて肺の転移性石灰化を検出した 10 例について報告した。悪性腫瘍に伴う 4 例では全例に